

竹馬・白馬・生き馬

なすがまま

1 蕎麦は何から？

女将の店に来ている21才の女子大生アルバイトは、負けず嫌いで頭の回転が良い、紗希という名の娘である。彼女は、笑顔でお喋りする明るい娘なのだが……

実家から出て、ひとりで暮らしているからか、何かと店で女将に報告する。

今夜も宴会客の退店を待ちかねたように言う。

「蕎麦って何から出来てるか、知ってます？」

「はあ？」

あまりに幼稚な質問、しかも上から目線な訊きかたに、呆れながら女将は考えた。

――何を聞きたいのだろう？ 蕎麦？ そば粉をこねて作るから、蕎麦、決まりきったこと、そんな単純な答えを言わせたいのか？ それとも何か、とんちでも潜んでいるのか？ は？

怪訝そうな女将の顔を見て、紗希は繰り返す。

「蕎麦ですよ、蕎麦、食べる蕎麦」

イラつく――。おさなごの質問なら、丁寧に教えても良いが、相手は子供ではない。直ぐに答えを言うのはおもしろくない。相手への質問の仕方も教えたい。女将に様々な思いが去来する。

「蕎麦くらい知ってるわ！ でも、何で、そんな……こと急に訊くの？」

「今日、学校で、就活に向けての、常識テストを受けたんです。その中に、同類となるモノを選ぶっていう問題があって、例題《チーズ＝牛乳》ってあったんです。だから、主原料と製品の関係にあるものを選ぶんだって分かったです」

「うん、それで？」

「で、麩と小麦粉は正解だとして選んだんですけど、オムレツと目玉焼き、これは違う。他にも色々ありましたけど、その中に、《蕎麦には、山に葵》って、書いてあって……」

「山に葵ねえ、それで？」

「山に葵って、何だ？ 蕎麦って、何から出来ているんだ？ 分かんない！ って、思って……」

喋り出すと、片付けの手が止まるのが、紗希の欠点である。

「手を止めないで、片付けなさい！」

注意もしなければならない。こっちは厨房の片付けが、油まみれの片づけが山積みなんだから――。

こんな紗希だが、有名私立大学に在籍し、しかも彼女は授業料が無料の特待生。何でも、年に二回の試験で、学部上位20番以内に入らなければ、授業料無料は停止。だから、その都度、目の下にクマができるほど勉強して、授業料無料を維持している。「母子家庭だし、他にも兄妹がいるし、有料となるわけにはいかないんです」と何度と無く言うの聞いている。

からかうのは、こんなもんで、勘弁してやるか――。

「蕎麦は、蕎麦の実から出来てるの！ 蕎麦の実をひいて、粉にしたそば粉！」

「あー、蕎麦、植物の蕎麦なら知ってます。そば粉ってモノがあるんですね」

目を丸くして、驚いた様子の紗希に、驚く。

「はあ？ そば粉、知らんのかいな？」

「スーパーとかに売ってます？ 見たことないです」

「まあ、確かに、スーパーには売ってないな。売ってるのは、乾物屋さんかな？」

「どうりで……」

教えると、素直に聞く。可愛いと言えば可愛い。非常識なところも大いにあるが、天真爛漫、天衣無縫なのだろう。

「テストのあと、みんなで、答え合わせしましたけど、誰も分かんなかったんですよ。は一、そば粉ですかー」

呆れる部分は大きいですが、毎度のことで、返してくる言葉が面白いところもある。ここはひとつ楽しみながら、じらしながら教えようと思う。解説するほうも、ちょっと楽しく感じる。それで、宴会の片付けも順調に進む。

テーブルの上を片付け、最後のダスター掛けを終えた紗希が、思い出したように本題へと促す。

「蕎麦は、そば粉、ですよ。じゃあ、山に葵は？」

「紗希、あんたは、いつからここで、バイトしてるん？」

「え？」

「山に葵も知らんと、居酒屋でバイトしてたんか？」

「え？」

「冷凍庫の中に入ってるのを、何回、取りに行った？」

「え？ あるんですか？ ここに」

わざと落胆を前面に出して、情けない思いが伝わるように言う女将。楽しんでいる最中だ。

「他の皆は知らなくとも、あんただけは知ってて欲しかった」

「……？」

「パックの表に、漢字が、ちゃんと書いてあるでしょうが」

「……？」

「毎日、使ってるよ！ 今日だって、あんたも、見てるはずよ」

「見たんですか、今日も……？」

「山に葵は、わ・さ・び」

またまた、目を丸くして「えー！ ワサビって読むんですか！」と叫ぶ。

理想のリアクションに心地良くなる。これじゃ、どっちが遊ばれてるのか……。

まあ、先に生まれた者の特権である。知識のひけらかしでもするか。そうして、女将を有頂天へと誘うのだから、紗希のお惚けは愛すべきチャームポイントなのだろう。

「そう、ワサビ。わさびの葉っぱは、葵の葉によく似ているのよ。生える場所は山地、山に生える葵の葉っぱ、その根っこがワサビなの。で、山に葵と書いて、山葵で、ワサビって読むの！」

「へー、そうなんですか！　ワサビなら、はい、確かに毎日、見えています」

ここで一言、言わなければ気が済まない。

「まったく……。それにしても、何と高飛車に、この私に質問するもんだわ！　蕎麦は何から出来てるか、知ってます？　だもんね。知ってます？　と、来たもんだ」

「すみません……」

「はい、そしたら、もう少しで片付けも終わるから、がんばって」

片付けは随分と進んだ。もう少しである。終わりが見えて、お喋りな女将は、もうちょっと知識のひけらかしがしたくなった。

紗希の口から面白い言葉が飛び出すのも、期待しつつー。

2 竹馬、白馬、生き馬

宴会の片付け物は、洗った器を棚に戻すだけとなった。あとの片付けは紗希ひとりでできるだろう。

女将は、今日はよく働いたから、ボリューミーな賄いにしよう決めて、準備に取り掛かる。手は使っていても、口は空いている。お喋り好きの口が、知識のひけらかしを始める。

「蕎麦……、十割り蕎麦、ってあるやろ」

「10分割になってるパックがあるんですか？　私は4分割しか見たことありませんけど？」

「はあ？」

「コンビニに売ってる蕎麦で、4分割とかのパックじゃないんですか？」

「はあ？」

「コンビニに売ってますよ。知りませんか？　仕切りがあって、4割蕎麦って、書いてあって、その10分割蕎麦のことじゃないんですか？」

オバサンは知らないでしょうけど、とでも言いたいように語尾を上げて言い、得意げに説明までする。「あー、あるな」軽く応じると、今度は俄かに声のトーンを下げて言う答え、それが、なかなか良い発想をする。とにかく笑える。この瞬間がおもしろくて、彼女との会話は楽しい。止められないー。

「面白いやん！　パックが10分割で、10割そば？　わんこ蕎麦みたい！」

「違うんですか？」

「違うわ！　十割り蕎麦は、そば粉100%って意味なの！　1割は10%」

「あー！　そっちい！」

「恐らく、その四割蕎麦、そば粉の量とパックの分割を掛けてるんじゃないの？」

「……？」

分からないようだが、賄いの鶏肉を揚げるのに集中、暫くは放っておこう。

唐揚げを揚げる音が耳に心地良い。空いているコンロですまし汁を作ることにする。具は残り物で、造り用の鯛がある。サラダは宴会用にと多めに仕込んだ、おからサラダを付け合せる。そうだ、キャベツ、さっと茹でて、市販の塩昆布と和えてごま油をかけよう。これがいけるんだな。よし、これで今夜は豪華な賄い食の完成だ。

紗希の仕事も終わったようである。お腹も相当に減っている。早く、食べよう。

紗希がご飯を盛って、食卓を整えたのを見届けて、女将が言う。「さあ、食べよう」

カウンター席に並んで腰かけ、「いただきます」のあと、箸を動かしながら、そば粉100%の蕎麦もあれば、小麦粉を混ぜた蕎麦もあると話す。4分割のパックで掛けているのも説明する。

聞いていた紗希が言う。

「そうなんだ。知らなかったあ……。そのテストを受けた友達、みんなで答え合わせをしたんですけど、蕎麦は何から出来ているんだ？山に葵って何だって、誰も分かんなかったんですよ。あははは――、明日、みんなに言ってやろうっと」

その後も、漢字が読めなかった話、算数の割り算、追いかけ算、時間と距離の簡単な計算問題、出来なかった話、間違った話を友達の解答を交えながら、次から次へと話した。

聞きながら食事を終え、お箸を置き、女将は言った。

「面白いなあ、あんた達は、白馬だわ」

「え？」

「白馬は、尾も白い、おもしろい」

「……？」

「尾、しっぽ、しっぽも白いで、尾も白い」

「……？ あははは、尾も白い、おもしろい」

「やっと、来た？ あんた達は、竹馬の友ならず、白馬の友だわ！」

「……？」

「ちくばが、何か分からんのやな？ 竹輪じゃないよ、ちくば」

「竹に乗った馬、そんな訳、無いですね」

「無いな。チクバはタケウマやね。タケウマに乗って遊んだ友、幼友達を竹馬の友って言うんや。で、竹馬の友ならず、白馬の友、尾も白い友、おもしろい友！」と

「あー、なるほど！」

「しかし、さっきの、蕎麦には山葵って問題、洒落が効いてる感じがして、なかなか良いじゃない」

「え？ そうなんですか？」

「もうイイわ。十割り蕎麦は、そば粉100%、あんたは天然100%や」

負けず嫌いの彼女は、何であれ、知らないとは言わない。だから、自分の知っていることから、解答を探して、返答する。しかし、それが間違っていることの方が多い。

退屈な大人は、それが面白くて――。

まあ、知らないだろうと思うことを探して、訊ねるのだから、ちょっとしたパワハラなのかも知れない。

大人は彼女らより、うんと長く生きた分だけ、多くのことを知っている。だから女将は、また知っていることを話す。

すると彼女もまた、大人が思いもよらない返答をする。その返答は時として、おもしろかったり、感心させられたり、そしてずっこけさせられたり。

店をきりもみしながら聞くのだから、いらっとする時もあり疲れるのも事実。しかしながら、忙中閑ありということもあるので、それも、まっ、良いかと思う女将である。

それから3ヵ月後、とある会社説明会に参加した紗希。その場で聞いた言葉を、走り書きにしたメモを、女将に見せながら言った。

「当社は、まあ、生き馬の目を抜くような会社ではありませんって、言ったんです。何という意味ですか？」

「あんたは、何と思ったの？」

「私は、あー、ここの会社は残酷な会社じゃないって、言ってるんだと思ったのですが、合ってますか？」

当たらずとも遠からず、それよりも質問の仕方が上手くなっていて、少し安心。天真爛漫、天衣無縫を好意的に受け入れる、そんな人ばかりがいるはずの無い社会に出ても、まあ大丈夫だろうと思う女将。

見せたノートに、ひらがなで、《いきうまのめをぬく》と、書いてあったのは、仕方がないとしてやりましょうと――。